

佐伯三十三観音巡り

上浦・津久見

吉田 勝 重

(会員 佐伯市女島)

第七回佐伯三十三観音巡りでは、三月十一日(金)、上浦の第二十八番札所の千眼堂(現千眼院)と、津久見市第三十番札所の落ノ浦の本教寺を訪問した。参加者四十二名。天候も良く三十三観音巡りをするには大変良い日であった。

第二十九番札所の津久見市鳩浦の浄土庵は、現在では跡地がわかるが建物などの遺構は残されていない。佐伯四国三十三所では浄聖庵とある。

この浄土庵については、鳩浦にある真言宗大谷派、海光山立法寺ではとの説もある。

立法寺は、寛永廿年(一六二四)白杵の善法寺より来た慶円が鳩浦河内こゝに本堂庫裡を造り開基したと云われている。

る。享保十二年(一七二七)九月火災に遭い焼失。六代了惠の時現在地に移転している。

第二十八番札所 千眼堂

御詠歌 身のあかをすすく夏井の浦のとや
心の空にはるる月かげ



高野山真言宗 千眼院

この千眼院は、開基当所は千眼庵と称し、天和三年(一六八三)夏井地区野平山に開基された。高野山真言宗に属し本山は金剛峰寺である。

元禄の頃に現在地に遷座したと考えられる。

千眼庵は享保十四年（一七二九）に千眼堂として佐伯三十三観音廿八番札所に記載されている。

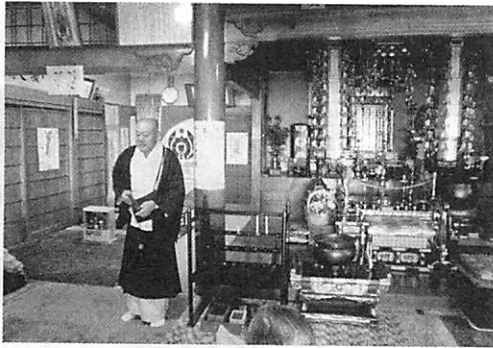
本尊は、十一面千手観音で秘仏とされ、二月初午の日から一週間開帳される。高さ五十六、九センチの厨子の中に納められている。檜造りの高さ三十四、二センチの寄木造の像である。室町後期の作と云われている。



本尊 十一面千手観音像

この千眼庵は、大日寺末寺東禅寺の和尚の墓所として作られたとも云われている。

仲谷泰典和尚の話では、平成二十七年が高野山開創一



二〇〇年にあたるといふ。

本堂の左手には、上部に「莫師心」と書かれた迫力のある文字と、下部に葛城山人と銘のある和歌の掛け軸が懸けられていた。

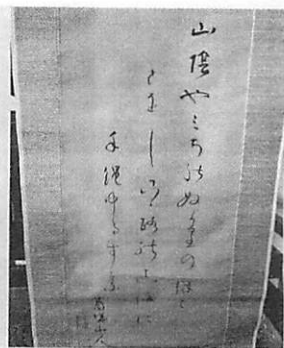
この書は正徳三年（一七二三）八十七歳の時に順運という和尚が書いたと言ふ

順運は大坂藩邸にいた人で十三歳の時出家し、儒学者伊藤東涯とうがいに師事した人である。

「莫師心」とは「心を師とするなかれ」と云う意味だそうだ。



享保九年九月寄進の石灯籠



と書かれた石鉢、経王石書塔があった。
 (詳)と書かれ石灯籠や元禄七年三月十七日(寄進者不詳)

和歌には「山陰やみちのめか里のほどとをし古満に手縄ゆるす奈」と書かれていた。

境内には、享保九年九月吉日(寄進者不詳)



経王石書塔には「右各各施主福報供盛暮虚空施催始是昂増長無休息乃法界平等利益」と書かれていた。

この千眼院の所屬する真言宗は古義派と呼ばれる一派と新義派と呼ばれる派がある。空海の十大弟子、真濟・真雅・実恵・道雄・円明・

真如・杲隣・泰範・智泉・忠延により真言宗の教線は擴張され、夫々の拠った寺々が対抗、独立の動きが強まり数多くの派、教団が発生した。

この千眼院は高野山派(金剛峰寺)であるが、他に善通寺派(善通寺)、豊山派(長谷寺)など十八派あると言われていた。

日本の仏教の辞典(学研)によると、現在五十二の団体が記されていた。

網代の福勝寺末庵
薬師庵



に「親鸞聖人七〇〇回忌、鑄匠京都、岩澤徹誠」の銘が彫られた鐘があった。

二番目の訪問地は津久見市網代の薬師庵であった。

この薬師庵は佐伯藩の三大薬師の一つであるという。

三大薬師は、蒲江東光寺の薬師庵、本匠井ノ内の薬師庵とこの網代の薬師庵である。堂内には薬師如来が祀られていた。

また、薬師庵の一角



網代の薬師庵の本陣と本尊の薬師如来

第三十番札所 高明山本教寺

御詠歌

小夜風 木の葉も落ちの 浦波に
浮かぶ誓いと 聞くぞたのもし

第三十番札所は、津久見市四浦落ノ浦にある高明山本教寺である。浄土宗西山禅寺派に属し、本尊は阿弥陀如来である。



この本堂の左手に薬師堂が立てられている。

私たちは、まず本堂にお参りして住職である大野泰礼さんのお話を聞いた。

それによるとこの寺の観音様は、寺の上の方四五〇段程の所に権現堂と呼ばれる一つの洞窟があり、そ

の洞窟の中から初代鏡空曆道上人が発見し、今から三百年ほど前に一草庵を建て祀ったと言われている。現在の観音堂（薬師堂）は二度目のものである。

この洞窟の写真と

観音様の縁起が、観音堂（薬師堂）本陣の左手に掲示されていた。

《権現様の由来》

観音発遣の地

昔この地は「たぶ」の太木が生い茂り、入り江は海深く魚多く、近郷屈指の漁場であった。



慶安の年（今から三六三年前）、毎夜山腹に怪火が出るとの噂が漁民の間に広まり、曆道上人（曰杵大橋寺第六世）は、自ら漁師の案内を受け、火のある所を尋ねて山中に入ると、老比丘尼現れて曰く「我観音を奉事すること年久しく、命近きを知り、比叡の山より戦火を逃れて因縁深

和尚さんの話は続く。

観音様とは観世音菩薩の事で、世の衆生がその名を唱える音声に応じて大慈大悲を垂れ、解脱を得させるといふ。

阿弥陀如来の脇士として勢至菩薩とともに三尊として祀られる。阿弥陀如来の補助の役目をするといふ。

お寺では毎日、三つの佛さんに「三存来」といってお経をあげるといふ。

十一面観音の十一面の意味は、一体は衆生を、他の十体は十方世界（東・西・南・北・北東・南東・南西・北西・天上・天下）を表しているといふ。

佛様には、法身、報身、応身の三つの姿があるといふ。法身は自然を構成する大宇宙、私たちの身の回りにある何もかもを指し、報身は自然現象を誰にも分かり易い姿例えば、土は地蔵様、水は観音様、火は不動様というように示したものを指し、応身は衆生の願いに応じて現れた仏様の姿と言われている。

また、仏は如来、菩薩、天部、明王の四種類に大別出来、如来はお光りを遠くからくれるといふ。

私たちは現世、この世に生を受けいろいろな事を行っ

ている。その中には五悪と呼ばれるものがある。

五本の指に例えられる親指が殺生、人指指が偷盗、中指が妄語・偽り、薬指が飲酒・我慢、小指が邪淫である。この五指にも仏名がついている。

印相では親指は大日如来、人指指は阿弥陀如来、中指は釈迦如来、薬指は薬師如来、小指は弥勒菩薩とつけている。

生前のもろもろの出来事、五悪の質と量で死後の地獄世界（六道）地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天上界）に行くかが決まるといふ。

しかし、佛になって通る道にも仏様の御加護があるといふ。これが十王経の考えであり、夫々に手助けし慈悲をくれる仏様がいる。

仏になって通る道、すなわち初七日、二七日、三七日、四七日、五七日、六七日、七七日（四十九日・中陰）、百カ日一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、三十三回忌がそれぞれにあたる。

それぞれの仏様・十王神は次の様になっている。

初七日（七日）・・・不動明王・秦広王

二七日（十四日）・・・釈迦如来・初江王

三七日(二十一日)・・・文殊菩薩・栄帝王
 四七日(二十八日)・・・普賢菩薩・五官王
 五七日(三十五日)・・・地藏菩薩・閻魔大王
 六七日(四十二日)・・・弥勒菩薩・变成王
 七七(四十九日)・・・薬師如来・泰山王
 百力日(百日)・・・観音菩薩・平等王
 一周忌(一年)・・・勢至菩薩・都市王
 三回忌(三年)・・・阿弥陀如来・五道転輪王
 七回忌(七年)・・・阿閼如来あしやく・蓮上王
 十三回忌(十三年)・・・大日如来・拔苦王
 三十三回忌(三十三年)・・・虚空蔵菩薩・慈辺王
 更に卒塔婆そとばの上部を五輪と言ひ、天(頭を表す・頸より上)、水(腸)、火(心臓)、空(肺)下を表している。五体満足の意味があると言う。

私たちは日常的に「ありがとう」と言う言葉を使う。この言葉も発句はつくまことの中にも書かれている。意味は、「今、命あることにありがとう」である。

このような話を聞きながら本堂での研修を終えた。お寺の本堂には阿弥陀佛を中心に七体の如来の名前を明記した位牌の様な物が祀られていた。



南無なむ寶勝如来、多寶如来、妙色身如来、阿彌陀如来、廣博身如来、離怖畏如来、甘露玉如来の名が読み取れた。本陣の壁には「十方世界」念佛衆生ねんぶつしゅうじょう「攝取不捨」光明徧照せつしゆふしやうくわうみやうへんじょうと書かれた啓白文けいひやくもんが張られていた。

観音堂の天上には鳳凰の像があり、入口には飛天の絵が描かれた梵鐘も懸かっていた。

この梵鐘は昭和四十四年三月に落ノ浦の甲斐定一・妻センが奉納した梵鐘であるが、次のような銘文が鑄出されていた。

浄土宗西山禅林寺派
 開基大橋寺六世
 鏡空曆道
 慶安三年九月
 建立當山第四世
 英空曆賢
 施主白杵
 田仲清三郎
 元禄四年三月
 と書かれていた。

その後、私たちは、本堂で泰礼和尚の津軽三味線を演奏を聴いた。泰礼和尚は「佛の教えを説く」方法として津軽三味線を利用活用していた。



泰礼和尚は津軽三味線を高橋竹山に習い、津軽三大節と呼ばれる「じよんがら節」「あいや節」「よされ節」や「りんご節」を奥さんと共に演奏歌唱し、私たちに聞かせてくれた。

「炭坑節」の曲をアレンジした「信心炭坑節」は、炭坑節の踊りを踊りながら、佛の教

えを説いていくものであった。

あいや節が嫁入り口説きの歌であり、よされ節が「世去れ節」、春を待つという願いが込められている歌であることもわかった。

その後、私たちは保戸島を眼の前にした地区、間元を訪問した。

四浦半島先端 まもと 間元・保戸島 ほとじま



保戸島を眼の前にした地区、間元は十四世帯人口二十二名の小さな漁村である。

本教寺のある落ノ浦地区から北上した四浦半島先端にある地区である。

引き潮の時、浅瀬伝いで渡れそうな感じがした。流れは速いと言う。

この間元の一角に、小

さな祠があった。

濱の一角、ひさかきの木に囲まれ美しく清掃された祠



であった。

石の社には年号が無かったが小さな鳥居と「水利明王」と書かれた御札が安置されていた。

今回の三十三観音巡りは、この二つのお寺の訪問で終わった。問元で解散式を行って五四一号線を通って上浦へ移動した。

その後、希望者だけで上浦蒲戸崎展望台に登った。

蒲戸崎展望台は、昭和六十三年からスタートしたふるさと創生事業の一環として整備された所で、北は四国の佐田岬、伊方町、佐賀関方面から、九六位山、由布・鶴見の山々、南は蒲江の仙崎、木立の元越山、東は四国の宿毛・八幡濱、西は大分百景の上浦三つ石、尺間山、彦嶽が展望できる。



蒲戸崎展望台

また、会員の松村輝博氏から豊後水道で遭難した「伊号六十三潜水艦遭難」の話も聞くことができた。

すべての日程を終え帰途についた私たちの耳に避難緊急警報のサイレンの音が聞こえ、何だろうかと皆で不思議がっていた。あとで、この警報が東北大震災による海嘯警報であることがわかった。